

### 「経済学批判体系」の一考察(4)

HIRABAYASHI, Chimaki / 平林, 千牧

---

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The Hosei University Economic Review / 経済志林

(巻 / Volume)

43

(号 / Number)

4

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

1975-12-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008360>

# 「経済学批判体系」の一考察（四）

平林 千牧

## 一 はじめに

二 「経済学批判」成立期の資本・賃労働関係の解明

三 マルクスの古典派批判の基礎構造

1 スミス労働価値論批判の視角

一

（以上、本誌、第四〇巻第三号、第四一巻第二号、第四二巻第一号）

## 二

1

A・スミスは、『諸国民の富』第一篇第五章で、彼が独自に把握した労働生産過程に基づいて労働価値論の論証を与えていると言つてよいだろう。あるいは、むしろ、スミスの労働価値論は、あらゆる社会に共通な経済的基礎過程の経済学的把握の独自の表現である、としうるような性格とも考えられよう。このように考えるならば、『諸国民の富』第一篇第五章での領域を、ただ単に流通領域での商品交換を規定する法則の分析に当てられたものとするわけにはいかないであろう。それゆえ、スミスの価値論にたいして、「たんに、私の労働は社会的労働としてのみ、

したがって私の労働の生産物は等置の社会的労働にたいする支配としてのみ、私の富を規定するという、交換価値の概念だけである」(Mehrwert, Werke, Bd. 26-1, S. 46-47) という性格規定を与えうるとしても、これだけでは、まだ彼の価値論の十分な検討とは言いえないように思われる。確かに、スミスの交換価値にかんする理解は、「私の労働と他人の労働＝社会的労働との等置」以上に出るものではない。だが、スミスにたいして問題とされなければならぬことは、彼の労働価値論がこうした「等置」として説かれていてその根本的な性格である。<sup>(2)</sup>

おそらく、マルクスは、『諸国民の富』第一篇第五章の冒頭の「ひとたび分業が徹底して行なわれると、……」というスミスの叙述を強く念頭に置き、スミスの二面的価値規定の考察を進めていこうとしていたのであろう。彼が、第五章の価値規定について、「ここで強調されているのは、分業によってひき起こされた変化である」、「ここで強調されているのは、分業および交換価値によってひき起こされた私の労働と他人の労働との等置……」(以上、v.a. O., Werke, Bd. 26-1, S. 46-47. 傍点、原文のイタリック)である、と述べているのはそのことを示すものである。しかし、スミスが設定している分業は、こうしたマルクスの視点と、必ずしも十分に対応しうる性格をもつものではない。すでに、第一篇第一―三章の分業論は、第五章を前提とし、彼の生産力的視点に基づいて、工場内分業も社会的分業も区別されることなく、いわば労働過程における労働生産力の増大と社会的生産としての生産過程の拡大とを同時に設定するものとなっていた。<sup>(3)</sup> スミスがこうした分業論をもって、彼に抽象可能であった社会の経済的基礎過程であるとしたことは明らかである。したがって、第五章におけるスミスの価値規定も、このような分業設定に対応する関係で説かれているものとされなければならない。事実、第五章での彼の二面的価値規定とりわけ労働を本源的購買貨幣とする投下労働価値論は、労働生産過程の交換過程的把握とされるように、彼の分業設定と不可分の関係をもつ社会の経済的基礎過程に基づく価値規定となっている。あるいは反面からすれば、こうし

### 3 「経済学批判体系」の一考察(四)

た価値規定自体がスマスに特有な労働生産過程把握の表現となつてゐるものと考えられよう。

したがつて、スマスにとつては、「分業の徹底」は、単に社会の経済的基礎過程での生産力の拡大という程度の意味をもつものにすぎないのであつて、とくに、ある変化が強調されているわけではない。仮りに、変化ということに着目するならば、それは、「分業の徹底」によつて、彼が商品経済的に絶対化してとらえた社会の経済的基礎過程が、彼の労働価値論証にたいして必要十分な条件になつた、という意味あひのことにならう。こうして、分業という表現のうちに独自の労働生産過程把握を示し、これを対象とする労働価値論を展開したスマスにおいては、社会存続の絶対的条件たる経済的基礎過程が商品経済的価値規定と不可分離のものとして説かれてゐるのである。それゆゑ、彼にとっては、そもそも「私の労働」と「他人の労働」または「社会的労働」とのずれなどはまったく問題外のこととならざるをえなかつたのである。商品対商品の価値関係つまり「交換価値の概念」の性格だけをとり上げるならば、このようなスマスの労働価値論の展開はきわめて不適確なものとされえよう。したがつて、マルクスのスマス批判は、そのかぎりでは十分のように見える。しかし、今指摘したスマス労働価値論の性格が考慮されるならば、マルクスの批判は、スマスの論理構造に十分踏みこんでいるとは言ひ難いように思われる。つまり、マルクスにとつてさらに検討されるべき事柄として、スマスの「等置」を必然的なものとしてゐる「分業」それ自体の理論的性格が、すなわち「諸国民の富」の原理的領域においてその占める地位が十分追求されずに残されてゐると考えられるのである。

もちろん、資本・賃労働関係を二つの側面(過程)に分離し、対象の原理的把握を行なおうとしたマルクスにおいては、依然として「單純な商品交換とその価値法則」(a.a.O., Werke, Bd. 26-1, S. 59) という範囲でスマス価値規定の問題を取り上げる以外になかつた。そこで、スマスが第一篇で「商業社会」として叙述した世界を、「こ

ここでA・スミスは、最初に商品交換一般を、すなわち交換価値や分業や貨幣などの性質を説明していたのである」(a.a.O., Werke, Bd. 26-1, S. 48) という指摘に限定してしまふことになるのである。それにしても、スミスの「商品交換一般」における考察が、「分業」を伴うものとして取り出されているのだが、そうした「交換一般すなわち交換価値や貨幣」に「分業」が並べて問題にされながら、これにたいする固有の批判的検討を欠いていることは、反面ではマルクス自身にも問題を残すものであった。この点に関してはマルクスのスミス剰余価値論の評価にも現われているのであって、それを取り上げて検討してみなければならぬ。ここでは、まずそれに先き立って、のちの論点とも関係する「交換価値や貨幣」に関してマルクスが論じている問題の一つを検討しておこう。

マルクスは、スミスが「労賃の自然価格」に関する研究で商品の正しい価値規定に立ち帰っているながら、彼の「労賃の自然率」が「生活手段の自然価格」によって規定され、またこの生活手段の自然価格はこれを形成する「労賃」と「利潤」と「地代」との自然価格によって規定され、こうして「悪循環」が「無限に続く」(a.a.O., Werke, Bd. 26-1, S. 67) 関係にあるのだということを批判している。そして、こうしたスミスの「労賃に関する明白な矛盾」には、実は「価値の尺度と言う場合に、価値の実体である内在的尺度が同時に、貨幣は価値の尺度であると言われる意味での価値の尺度と混同されている」(a.a.O., Werke, Bd. 26-1, S. 121) という問題があることをも指摘している。<sup>(6)</sup> 確かに、スミスが商品の「交換価値の実質的尺度」を労働としたとき、彼は、マルクスの理解による価値の内在的尺度と外在的尺度とを区別することはできなかった。というよりはむしろ、すでに考察したように、スミス自身の尺度にたいする理解は、そうした区別を否定するところに成立しているものと言っているのである。したがって、周知のスミスのことではこの点は、「労働はあらゆる商品の実質価格であるが、貨幣はその名目価格であるにすぎなく」(The Wealth of Nations, ed. E. Cannan, vol. 1, p. 35. 岩波書店、大内・松川訳I、一〇九ページ)

とされたのであった。そして、このような彼の価値尺度にたいする見地は、その労働価値論証方法と不可分の関係にあり、理論的に必然的なものであった。しかし、スミスのこうした理論的処理は、マルクスが正しく述べているように、「自然価格」概念をその労働価値論に基づいて正当に説明する道を閉ざすものになっていた。つまり、スミスは、「内在的尺度」と「外在的尺度」とを統一したさいに、価値の形態＝価格を正しく説明することを断念しなければならなかったのである。

ところで、マルクスがスミスの「労賃の自然率」にみられる「悪循環」やこうした価値尺度に関する「混同」を批判している場合、彼の従来からの批判的検討の文脈からするかぎり、判然としたものとは言い難いが、二様の論点が介在しているように思われる。すなわち、その一つは、すでに『経済学批判(第一分冊)』で論じられた論点であって、「労働時間が価値の内在的尺度であるのに、なぜそれと並んでもう一つの外在的尺度があるのか?」(*Zur Kritik der politischen Ökonomie, Werke, Bd. 13, S. 67*)とされたものである。ここでは、投下労働量による商品の価値決定とそれが社会的に受け取る「形態規定性」としての価値表現上の現実的尺度定在が論じられ、価値の労働実体にたいする形態上の把握いかんが主に問題とされているのである。<sup>(5)</sup>ところが、この同じ論点が今のスミス批判の場合には、必ずしもそうした問題を主たるものとして論じることはなっていない。つまり、「労働時間すなわち労働そのものが価値の尺度でありまた価値を創造する要素だということと同じ意味で、労働の価値を、価値の尺度とすることはそれ自体まちがいで愚かなことであろう……一商品をもつて買うことができる労働が、その商品に含まれている労働と同じ意味で尺度として通用するとは言えないであろう。単に一方は他方の指標であるにすぎないであらう。」(*Mehrwert, Werke, Bd. 26-1, S. 44*)と<sup>(6)</sup>なっている。

マルクスは、前者の内在的・外在的価値尺度によって、「労働そのものが交換価値をもつ」のに、この交換価値を

もって「交換価値の尺度とするのは悪循環」であって、この悪循環を断ち切るために外在的尺度としての形態規定性を明らかにする論理を考えていたのであった。つまり、「労働時間が交換価値の内在的尺度として与えられていて、この基礎のうえで賃銀を展開すること」によって、それが可能となる一面を見ていたのであった。<sup>(7)</sup>すなわち、すでに賃労働者の労働の価値形成的労働たる性格——つまり労働力商品の使用価値の価値形成的性格——を把握していたマルクスにとっては、賃銀がさしずめは労働(力)商品の価格形態たるものとして明らかにされなければならぬはずだったのである。したがって、この点を多少とも積極的に評価すれば、資本・賃労働関係における一過程(側面)つまり流通の過程が、労働力商品を中心とするW(A) [Arbeitskraft]—G—Wの単純な流通となっており、このW(A)の商品の価値をまずもって価格形態として規定させる要因とせざるをえない関係にあるということになる。<sup>(8)</sup>こうして、内在・外在の価値尺度論は、この場合に「交換価値の……悪循環」を断ち切るための交換価値Ⅱ価値の形態の論理形成を支える可能性として提出されているはずのものと考えられよう。

ところで、後者の論点では、この同じ尺度論が、商品価値を形成する労働と剰余を含む価値総量との関係として結局商品価値総量に占める必要労働量の比率として強調されることになっている。先きの引用文で、一単に一方は他方の指標であるにすぎない」とされた「指標」は、「労働の価値」を仮りに外在的な「尺度として通用する」ものとみなすならば、商品価値の実体量すなわちそれに投ぜられた労働総量にたいしてそうしたものとなるう、という指摘であろう。すなわち、こうした論法は、『剰余価値学説史』での周知のベერი批判の箇所でもなされているのであって、そこではマルクスは次のように言っている。「一般に賃銀——または労働の価値——は、……諸商品の価値の指標になるであろうが、それは価値としてではなく、つまり賃銀が騰落するかぎりにおいてではなく、賃銀で表わされるところの、一商品に含まれている支払労働量が、それと関係する諸商品に含まれている労働総量に

つづての一つの指標であるかぎりにおいてである。」(a, a, O, Werk, Bd. 26-3, S. 157) マルクスは、これに続く文章のなかで、このような考え方をいわば「機知(Witz)」なのだと表現している。それゆえ、これは彼の本来的な議論の領域として取り上げる関係にはないとするべきかもしれない。だがそれにしても、この「機知」は、賃銀つまり「支払労働量」＝「必要労働量」と商品価値総量つまり総労働量との対比を示そうとしている。そして、その場合には、賃銀がふたたび価格形態の次元から労働量＝価値量の次元にひき戻され、労働量＝価値量を直接に尺度論の問題として取り扱うかのように示唆する結果となり、「労働の価値」の尺度論批判にたいして妥当するとは言い難いものとなっている。

もっともこの場合、マルクスは彼の「労働の価値」論批判にたいして直接尺度論の問題だけを論じようとしているわけではない。つまり、「労働の価値とは、……生産物のうち、彼自身のものである労働時間が物体化されている部分」だとするならば、「諸商品相互の比は」、「一商品の価値全体が支払労働と不払労働とに分解する」場合と、「充用された直接労働と充用された蓄積労働との割合が違う」場合とでは、異なる内実に立脚しているということなのである。したがって、むしろこの論点は、「リカードが利潤と剰余価値とを直接に同一視し、また価値と費用価格とを同一視」(以上、a, a, O, Werke, Bd. 26-3, S. 156-158)した難点の処理に関することに力点を置く結果となっているのである。それゆえ、「労働の価値」「指標」の「機知」はここでは、価値の内在・外在の尺度論に關するかぎり、価値量＝労働量の理解を軸としており、したがって、固有の尺度論の提起になりえていなかったと考えられるのである。また、こうした理論的脈絡は、すでに言及したように、マルクスの「リカード体系」における二つの「困難」、すなわち「価値法則に一致する資本と労働とのあいだの交換」と「一般的利潤率の形成、剰余価値と利潤との同一視、価値と費用価格との関係の無理解」、という古典派経済学の限界設定に結びついていると

言いうるだろう。

しかも、資本・賃労働関係の二つの側面への分解によって、「単純な流通」での「労働」を含めた「いろいろな商品」の「等置」関係という「グルントリッセ」以降のマルクスの考察方法は、彼自身の理論的展開を一面で制約する結果をも生じさせている点を無視することはできない。つまり、マルクスは、一方では労働力商品の価値が資本の生産過程における必要労働時間を通してその価値を規定される関係を十分承知していた。だが、他方ではこの関係を、労働力商品の価値規定自体としては、「単なる生存の見地」として資本・賃労働関係において「固定」し、労働力商品の価値通りの「等価交換」を堅持したのであった。それゆえ、こうした理解は、「労働の価値」による商品の価値規定批判に関連して提起されていた価値の外在・内在の尺度論にたいしても、それら自身の固有な解決を不徹底にさせてしまう結果となったのである。

結論的に言えば、今ここで取り上げたスミス労働価値論にたいするマルクスの批評の論点、すなわち「私の労働」<sup>(9)</sup>「社会的労働」としての「交換価値」の規定はスミスにおいては、いわば社会的生産の抽象的な枠組としての「分業」<sup>(10)</sup>「生産過程における労働と、その労働が自然に働らきかける——「本源的購買貨幣」としての——労働過程と不可分であった。したがって、当然のことであるが、マルクスはここで、すでに労働生産過程を包含しているスミスの労働価値論を対象にしているわけである。しかも、スミスの労働価値論は、こうしたものとしては、内在・外在の尺度論に関してみれば、すでに指摘したように、まさに同時に矛盾なく成立する関係にあったのである。それゆえ、この関係の批判的克服は、マルクスにおいては、一方では彼独自の労働生産過程の把握を、他方ではその労働生産過程を特殊歴史的に編制する資本の定式の把握を要請するものであったと思われるのである。

それにしても、マルクスのスミス批判では、彼の資本・賃労働関係の把握の方法からすれば、さらに「交換価値」

の領域から生産過程を、つまりスミスの剰余価値論を対象とする領域の批判的処理に関する問題が考察されねばならない。そこで、ひき続きその点を検討してみよう。

(1)(2) これらの点については、なお拙稿「『経済学批判体系』の一考察」(『経済志林』、第四二巻一号)九一ページ以下を参照されたい。

(3) この点に関しても、拙稿、前出論文、九六ページ注(4)を参照されたい。また、このようなスミスの理論的性格については、時永淑教授による次のような指摘も注目されるべきである。「スミスは、すでに分業論を説いていたことから、『人間の自然にたいする労働の社会的関係』を——たとえマニユファクチュア内の分業と商品交換を媒介とする社会的分業とを混同していたとはいえ——、事実上考察の対象としていた……」あるいは、「スミスは『諸国民の富』の序論冒頭で『あらゆる国民の労働は、その国民が年々消費するすべての生活必需品および便益品を本源的に供給する資源である』……と述べ、さらに、第一篇の第一、二、三章で、この『労働生産力』を改善するものとしてすでに分業論を——マニユファクチュア内分業と、『人民の大多数の多大の欲望を充足すべき大製造業……』という形で、実は生産物を商品として交換し合う関係によって成り立っている社会的分業とを、明確には区別していない分業論を——を説いたのちに、……労働＝本源的購買貨幣説を説いている。したがって、確かに一面では、人間の自然にたいする労働過程そのものを事実上見ていたのであり、さらにその分業論からすれば、この労働過程が社会的関係のうちに行なわれることも事実上見ていたといえる。」(『アダム・スミスの労働＝本源的購買貨幣説に関する一考察』、『経済志林』、法政大学経済学部創立五十周年記念論文集、下巻、一九七〇年一月、八二および八四ページ)。

(4) こうした意味で、スミスの第五章の世界は一面で商品経済史観をめぐりに完成させたものとも言うべき性格を有することになった。しかし、このような性格こそ、スミスの *imp* とも言いうるような強固な理論的世界となつたのであって、スミスに相対したリカードあるいはマルクスも、この *imp* に多かれ少なかれかかっているのである。なお、こうした古典派の抽象の性格とマルクスとの関係については、中野正『価値形態論』(日本評論新社、一九五八年)、第三章第四章を参照されたい。

(5) マルクスの「資本論」体系成立過程において、スミスとの関連でこの内在、外在の尺度論が占める位置については、時永淑教授の経済理論学会第二〇回大会での報告「資本論体系における資本形式の問題」(経済理論学会編『現代帝国主義と資本輸出』、経済理論学会年報第一〇集、一九七三年、青木書店、所収、一四五ページ以下)を参照のこと。

(6) ここで言及された「指標」の意味内容は、この文脈だけからは必ずしも十分に汲みとれない。しかし、マルクスはほぼ同様の意図を「サミュエル・ベリ」の批判を行なっている箇所でも多少敷衍している。なおまた、マルクスはこの文章中で、「マルクスについて論ずるさいに、さらに詳しく説明することができると言っている。そこで、のちとの関連でマルサスの箇所まで論じているところを、幾分長文になるが引用しておこう。

「マルサスが最初になければならないことは、リカードによる「労働の価値」と「労働の量」との区別を再度抹殺し、スミスの二つの見解の並置を一方のまちがった側面へ還元することである。／＼ある与えられた労働量は、それを支配する賃銀、またはそれと実際に交換される賃銀と同じ価値をもっているにちがいない。……この文句の意図は、労働の量と労働の価値という表現を等置することにある。／＼この文句は、それ自体、単なる同義反復、ばかげきつたことの表現にすぎない……これは、一定量の労働の交換価値は、別名賃銀と呼ばれるその交換価値に等しい、ということにはかならない。……一人の労働者が一二時間労働し、賃銀として六時間分の生産物を受け取るならば、この六時間分の生産物が、一二時間の労働にとつての価値を形成する(というのには、これが、賃銀つまり「一二時間の労働」と交換される商品だからである)。このことから、六時間の労働は一二時間の労働に等しいとか、六時間の労働が表わされる商品は、一二時間の労働が表わされる商品に等しい、などという結論は出てこない。……ただ、次のような結論が出てくるだけである、すなわち、労働の価値(というのには、これは労働能力の価値によつて計られるのであって、その労働能力が遂行する労働によつては計られないからである)、つまりある与えられた量の労働の価値は、それが購買する労働よりも少ない労働を含むということ、したがって、購買された労働が表わされる商品の価値と、この与えられた量の労働を購買または支配した商品の価値とは非常に違う、ということがそれである。／＼……商品費やされた労働は次のような労働からなっている……一、損耗された、したがって生産物の価値のなかに再現する機械などに含まれている労働。……二、消費された原生産物に含まれている労働。……三、賃銀に含まれている労働で、生きている労働と交換された労働である。だが、マルサスによれば、生きている労働は、それと交換される対象化された労働よりも大きくはない。したがって、商品は不払労働部分を含むことなく、ただ、等価物

を補填する労働だけを含んでいる。したがって、当然の結果として……それは利潤をもたらさないことになるであらう。」(Mehrwert, Werke, Bd. 26-3, S. 18-20. 引用文中の斜線は改行を示す。また、原文のイタリック体をとくに表示しなかった。)

(7) よく知られているように、マルクスは「この基礎のうえで貨銀を展開する」と言っている場合に、それは具体的には「賃労働の理論が解答を与える」(Zur Kritik, Werke, Bd 13, S. 47)ものとしている。マルクスがいわゆる「経済学批判体系のプラン」における「賃労働」の箇所ですら論じようとしたことについては、すでに諸議論がある。ここでは、そうしたことと自身が問題なのではなく、「労働の価値」という理解が、商品としての労働力をそれ自身で価値物としてとらえていることの批判として提出された視点が問題なのである。もちろん、この場合、マルクスのこの時期の労働力商品の価値規定の性格については、それ自体の検討がされなければならないのは当然のことである。

(8) これは、マルクスが、資本・賃労働関係を流通と生産との二つの側面に分離して考察を進めたさいに、こうしたことによつて、可能となったその考察方法の積極的性格の可能な一面についての指摘にすぎないのである。なお、このような点と関連して、労働力商品の価値規定に対する視角から、W—G—Wの単純な商品流通の理論的性格規定を見事に考察されたのが、宇野弘蔵氏の「労働力なる商品の特殊性について」であった。例えば、そこでは端的に、「労働力なる商品によつてこのW—G—Wを理解せんとするとき、吾々は始めて、この形式の抽象性を明確に認めざるを得なくなる。而もかくして始めてW—G—Wの一般の流通形式の意味も明らかになる」(「宇野弘蔵著作集」、第三巻、岩波書店、一九七三年、四九六ページ)という興味ある考察が加えられているのである。

(9) ちなみに、マルクスが与えている理解を示しておけば次のようになっていゝ。「賃銀すなわち資本家が労働能力の一時的な処分権を買うための等価物は、その直接的な形態における商品ではなく、姿態変換された商品すなわち貨幣であり、交換価値としての、社会的労働すなわち一般的労働時間の直接的物質化としての、その独立形態における商品である。」逆に、資本家が労働を買うための貨幣は、その労働者によつて生産された商品に含まれている労働量すなわちその労働者の労働時間よりも少ない労働量、少ない労働時間を含む。資本家は、貨銀を形成するこの貨幣額のうちに含まれている労働量のほかに、彼が支払わない追加労働量を、すなわち彼によつて支払われた貨幣に含まれている労働量を越える超過分を、買うのであつた。」(Mehrwert, Werke, Bd. 26-1, S. 57-58)

(10) なお、価値尺度論やこうした論点に関する原理的体系構成上の問題が、重要な論証方法にかかわるものとして、ここに介在している。しかし、それらに関する考察はそれら自身を対象とするは別稿に譲らざるをえない。なお、こことの関連で必要なかぎりでは、時永淑「貨幣の『価値尺度』機能と資本の商人資本的形式」(鈴木鴻一郎編「マルクス経済学の研究」上、東京大学出版会、一九六八年、所収)を参照されたい。

### 三

ところで、マルクスは、スマスの「労働と労働生産物との等置」を批判し、さらにスマスの剰余価値論の検討に移っている。『諸国民の富』の第一篇第六章以降の領域の考察である。しかも、この第一篇第六章以降のスマスの展開は、それまでの諸章とのあいだに「裂け目」が生じているとされているものであって、マルクスはこの「裂け目」をリカードにたいするスマスのいわば「功績」として評価したものである。すなわち、「対象化された労働が生きている労働の一部分を無償で取得する、すなわち支払うことなしに取得するということ……」、「スマスがリカードよりすぐれている点は、彼が、資本主義的生産とともにこの変化が現われることを強く力説していることである。」(Mehner, Werke, Bd. 26-1, S. 52)マルクスのこのようなスマス評価は、スマスの第一篇第六章以降の論述からみて、きわめて妥当のように思われる。しかし、こうしたスマスの剰余価値把握にたいする評価を、これまでの第一篇第五章の領域に関する彼のスマス理解と対応させると、必ずしも十分納得的とは言えないように思われる。すなわち、スマスが第一篇第五章において、マルクスの指摘する交換価値の概念を取り出したものとするれば、つまり分業に基づく商業社会の「私の労働＝社会的労働」としての交換価値の概念を取り出したものとするれば、こうしたスマスの労働の把握と無関係に彼の剰余価値把握もありえないはずである。そうだとすれば、果たし

て「諸国民の富」第五章と第六章との関連に「裂け目」を強調することが妥当であるかどうかが問題とされなければならぬ。

マルクスも指摘しているように、スミスは、「価値をつくり出すのは、どんな使用価値となって現われるかはまったくどうでもよいところの一般的な社会的労働……単なる必要労働」を抽象し、商品価値の実体としたのである。スミスは、このような労働把握をすることによって、事実上はどのような産業部面でも、「剰余価値は、……労働の対象的諸条件の所有者が生きている労働との交換によって取得する部分」(以上、*a.a.O.*, *Werke*, Bd. 26-1, S. 56-57)としうることであったのである。したがって、スミスのいわゆる *Additional quantity* としての剰余価値は、マルクスが「分業によってひき起こされた変化」として指摘した交換価値の概念を支えた分業としての「一般的な社会的労働」に基づくものと考えられるべきなのである。剰余価値の理論だけに限定すれば、スミスの剰余価値の把握は、マルクスの指摘のように、まちがいはなく先行諸学説を越えていると言いうるゆえんである。それゆえ、スミスの労働価値論の処理方法と剰余価値論とのあいだには、まずスミスなりの関連性が成り立っているものとされなければならないだろう。それにしても、マルクスがスミスに「裂け目」を見た彼の「経済学批判」の見地は、つまり資本・賃労働関係を二側面に分離して対象を把握するという見地は、この場合周知のようにこうした評価を示すことになっている。すなわち、「A・スミスには、剰余価値の分析、したがってまた資本の分析において、重農学派を越えてなしとげられた大きな進歩が見いだされる」(*a.a.O.*, *Werke*, Bd. 26-1, S. 56)と。

スミスが分業としての「一般的な社会的労働」の把握を通じて剰余価値を事実上社会的生産のうちに一般的に確定したことは、すでに見たように明白である。だが、こうしたスミスの剰余価値把握の性格からして、これを「資本の分析」における「大きな進歩」とすることは疑問となろう。資本・賃労働関係の一側面、すなわち剰余価値の

生産の側面というマルクスの考察からすれば、剰余価値分析の進歩が資本分析の進歩と対応するものとされたのであろう。または、マルクスはこのような評価によって剰余価値論に基づく学説史上の発展をただ強調するにすぎなかったのかもしれない。とはいえ、やはり資本の生産過程を価値形成増殖過程として解明しえなかったスマイスにたいし、このような評価を与えることは疑問とされるのである。<sup>(2)</sup> そもそも、スマイスにおいては、労働生産過程を交換過程化してとらえるという独自の原理的考察の性格によって、したがって労働生産過程を商品経済的に絶対化して把握するという独自の理論形成を基礎としているために、資本形態そのものを理論的に取り出すことはできなかった。あるいは、自然と労働との関係を交換関係として説いたスマイスにとっては、すでに、自然に代わって資本が登場し、資本と労働との交換関係が生じる場合を、本質的に異次元の区別されるべきこととされねばならないものではなかった。また、理論的に区別されようはずもなかったと言えよう。<sup>(3)</sup>

このような点に関しては、自然あるいは資本にたいする直接の生産者の側を考慮した場合にもスマイスの特徴が生じているのである。たとえば、彼は、第一篇第八章の冒頭で周知のように「労働の生産物は、労働の自然的報酬つまり自然的賃銀を構成する」と言っている。そして、さらに続いて、「土地の占有と資財の蓄積との双方に先行する事物の本源的状态」のもとにあつては、「労働の全生産物は労働者に属する」とし、またこうした事情においては、「労働の賃銀は、分業によってひき起こされる生産諸力のいっさいの改善とともに増加したであろう」ことを確認している。このような「事物の本源的状态」はしかし、「土地の占有や資財の蓄積」のあとまでは続かないのであつた。つまり、スマイスによれば、「この状態は労働の生産諸力における最も著しい改善が行なわれるずっと以前に終わりを告げたのであつて、それが労働の報酬つまり賃銀にいかなる効果を及ぼしたかをこれ以上さかのぼつてあつづけるのは無益であらう」(以上 *Wealth of Nations*, op. cit., Vol. 1, p. 66-67 大内・松川訳、I 巻、一

五七—五八ページ)とされる関係にある。

このようなスミスの理解によって明らかなのは、第一篇第五章で論じられた内容が「事物の本源的状态」に属することであったという点であり、これについては、すでに論じておいた内容と対応するものである。スミスは、この「本源的状态」としての自然と人間との関係すなわち自然—労働という労働過程の所産を、労働による「自然的報酬」=「自然的賃銀」というかたちでとらえていることになる。つまり、自然と労働との交換関係で取得する生産物を、直接生産者の労働の代価として自然的——または、この表現は「本源的」とも言いうるが——報酬・賃銀としているのである。この自然的=本源的这个という表現によってスミスが与えている理解は、すでに指摘したことであるが、彼による社会の経済的基礎過程に外ならない。彼が論証可能な状態として抽象し設定した世界で言えば、分業に基づく商業社会ということになる。したがって、ここでは「労働」が「最初の価格」として投下されることになるわけであって、こうした「労働の全生産物」が「労働者に属する」ことになるのはスミスにとって当然のことであり、またこのようなことは、彼の言う「生活必需品・便益品」としての社会の全生産物が労働の所産であるということの意味するにすぎない。

こういうことから明らかのように、労働生産過程の資本のそれとしての特質を、すなわち価値形成増殖過程を解明しえなかつたスミスにあっては、資本・土地所有が登場する現実の商品経済的枠組を対象とすることになれば、労働者は資本・土地所有に彼の「労働の生産物」の「分けまえ」あるいは「価値の分けまえ」を提供せざるを得なくなるわけである。しかもその際、スミスにあっては、こうした事態が「労働の報酬つまり賃銀にどのような効果及ぼしたかをこれ以上さかのぼってあとづけるのは無益」だともされている。つまり、彼は一面では、社会の経済的基礎過程に基づけば、社会の全生産物は労働の所産であって、しかもその経済的基礎過程を商品経済的関係で取

り出した仕方即して示せばそれは労働者に属する関係にある、と考えているわけである。また他面では、そうした経済的基礎過程が資本・土地所有・賃労働からなる社会的形式によって完成されることになれば、労働者の労働の生産物はそれに応じて他の二者と分け合う関係にたつのであり、これが現実の労働者の賃銀形態になることさえ確認されるなら、これ以上の理論的考察は不必要だとされているのである。<sup>(4)</sup>

このように、マルクスの指摘するスミスの「裂け目」は、強調されるほどの理論的分裂を生じているものではない。または多少逆説的に言えば、スミスの理論展開は、これを規制している本質的な性格からすれば、そもそも論理的に「裂け目」が生じようもないようなものになっているように思われるのである。それゆえ、こうしたスミスの理論的性格においては、資本は資本として理論的解明の対象として明確にされないし、また賃労働もそれに対応して資本家の賃労働つまり労働力の商品化として把握されようはない。それらはただもっぱら現実的な形態に対応しながら、彼の理論に無理なく取り上げられているにすぎないのである。したがって、マルクスの強調はむしろ彼自身の原理的体系構成の方法によっていると思われるのである。<sup>(5)</sup>

しかし、このようなマルクスのスミス評価に関しては、なお無視しえない問題が残されている。それは言うまでもなくスミスの剰余価値把握に關してである。マルクスの指摘に即すならば、スミスの剰余価値は、第一篇第六章以降で「資本と賃労働とのあいだの交換」に移ることによって「一般的範疇」として把握されている関係にある。そしてまさに、「スミスは、資本主義的生産関係のもつても、投下労働価値説の見解を貫くことによって、そのかぎりでは、剰余価値の発源を事実上とらえることができた」<sup>(6)</sup>わけであって、これがいわゆるスミスの価値分解説の見地をなしているのである。ところが、第一篇第五章で説かれたスミスの投下労働価値説と第六章で説かれている剰余価値説とは、明らかに前者がスミスによって明確にされた程度に対応して後者も明確化されているという関係

にある。つまり、重要なことは、「投下労働価値説の見解を貫く」ことによってこそ、「事実上」、「剰余価値の発源」をとらえることが可能とされている関係である。マルクスによれば、こうした点はこのようになる。すなわち、「A・スミスは、労働者の労働の全生産物がもはや労働者のものではなく、労働者がこの全生産物またはその価値を資本の所有者と分け合わなければならないという事情が、法則を——諸商品の相互に交換される比率すなわち諸商品の交換価値は、それらに対象化されている労働時間の量によって規定されているという法則を——無効にするということ、自分で反駁していたのである」(Mehrwert, Werke, Bd. 26-1, S. 50)と。このように、「ひとまずスミスの資本・賃労働関係にたいする把握がどうであれ、とうぜん彼の投下労働価値論と剰余価値論との関係を見ないわけにはいかないのである。

ところで、マルクスは、スミスの投下労働価値論の本質を、労働の価値による商品価値の規定あるいは労働と労働生産との等置と正しく見抜いたのであった。そして、彼はこうしたスミス価値論の性格に投下労働量による商品の価値規定が並存し混同されていることを批判している。この批判点は、スミス剰余価値論の彼の検討についてはやはり重要な理論的手掛りとなっているのであって、資本と賃労働との交換関係からなせ剰余価値が(スミスにとっても)生まれることになるかがこの論理で明らかにされている。「A・スミスは、貨幣または他の諸商品の交換を、完成された労働生産物と労働との交換と同列におくべきではない。というのは、はじめの交換において剰余価値が生ずるのは、諸商品がその価値どおりに、それに含まれている労働時間で、といってもその一部分は支払われていない労働時間で、交換されるということからなのである。……だから、完成製品と貨幣または商品との交換の場合における利潤は、もしそれらがその価値どおりに交換されるとすれば、完成製品と生きている労働との交換のほうが別の法則に従って、ここでは等価物が交換されないということから、生ずるのである。」(a.a.O., Werke,

Bd. 26-1, S. 51. 傍点、原文のイタリック。要するに、スミスにおいて、投下労働量による商品の価値規定が労働の価値によるその規定と混同されない限りで、剰余価値の把握が可能となっているというわけである。そしてこの場合に、そのような混同は、ただ単純に一方が正しく、他方が誤りという関係にあるものではなく、それぞれの従う法則が違う関係にあるものとされているのである。もっとも、ここでマルクスが「別の法則」と表現している「法則」自体については、必ずしも厳密な用語の使用を行なっているように思われない。いずれにせよ、資本・賃労働関係が一般商品の価値法則とは異なる次元に属する性格をもっているということであろう。つまり、「労働能力がその再生産と維持とのために費やす労働時間と、労働能力そのものがなしうる労働とが非常に違う」ということは、A・スミスにはよくわかっていた」のであるが、彼が資本と労働との交換で「困難」に直面したのは「資本が、労働能力ではなく労働に直接対置され」(a.a.O., Werke, Bd. 26-1, S. 44) ためなのである。

こうして、マルクスは、スミス価値論を切開しつつ、一般商品の価値法則と区別される資本と労働との関係つまり「完成製品と生きている労働との交換」(別の表現によれば、「対象化された労働と生きている労働との交換」)に「支払われていない労働時間」の存在の必然性を見出し、ここにスミスの Additional quantity としての剰余価値の成立を確認しているのである。確かに、このマルクスのスミス分析は、彼の「経済学批判」の視角からすれば十分なものように思われる。しかし、これは、スミス剰余価値論自体の特質の分析ということになれば、やはり別の問題を含むことになる。すなわち、マルクスは以上のような分析手続を通じて、結局もっぱら『諸国民の富』第一篇第六章においてスミスの剰余価値を「労働者が彼の賃銀を弁済する労働部分を越えて働く労働部分」として説明した」(a.a.O., Werke, Bd. 26-1, S. 58) ものとしている。だが、端的に言って、第六章で「資財 (stock)」の利潤を Additional quantity として始めて論じたということがあるにしても、それをただちにスミスの剰余価

価値把握の根拠となしうるであらうか。周知のように、スミスは、資財の利潤、土地の地代の形成を説いたのちに、これらの価格の構成部分の「実質価値」はすべて労働によって測られるとしている。すなわち、「労働は、価格のうちで、労働に分解される部分の価値を測るばかりではなく、地代に分解される部分の価値を、利潤に分解される部分の価値をも測るのである」(Wealth of Nations, op. cit., p. 52. 大内・松川訳Ⅰ、一五三ページ)と。スミスはここで、明らかに、彼が実質価値の尺度として設定した不変の価値尺度たる労働の価値を、ここでも価値の尺度として維持している見地を示しているである。本来、彼が労働を「本源的購買貨幣」とする理解によって、自然―労働関係を労働と労働生産物との交換関係として説いたのは、労働の価値が商品の実質価値の不変の尺度たるゆえんを明らかにするためであった。そして、彼にこのような理論的展開を成立させた根本的事情は、そもそも諸商品の交換関係の本質が等価交換の関係にあるということ、しかもそれがきわめて厳密な等価交換としてあるべきこと、という前提であり、しかもこの前提は労働を価値の尺度とすることによってのみ可能となりうるものだ、という絶対的確信である。したがって、スミスの世界では、不等価交換が一般的に許容されることはありえないはずなのである。もちろん、スミスの意図と彼が展開した理論的帰結とが必ず一致しているかどうかは別問題である。だが、こうしたスミスの意図が彼の理論的展開に貫かれていなければ、不等価交換の許容のもとに、彼の剰余価値の根源を見出す論理だけでは十分な検討とは言えないものではなからうか。

資財⇌資本および労働⇌貨銀がスミスの理論的把握においてもった基本的性格については、すでに若干の検討を行なっておいた。それらの点をふまえて、スミスの分業としての労働一般の性格を見る場合に、その労働は労働の生産力の発展としての分業と、労働の社会的存在⇌性格を極印しているものとしての分業とに密接な関係を有していることが考慮されなければならないだろう。この点は、言うまでもなく、『諸国民の富』の原理的領域すなわち

第一、二篇を貫いているのであって、例えば、それについて周知のように、彼は第二篇の「序論」で、このように述べているのである。すなわち、まず分業の徹底と労働生産物の相互依存との関係に言及し、「織工が自分の特殊の業務に専念できるのは、自分の織物が完成されるだけではなく、売られてしまうまでのあいだ、自分を養い、その仕事の材料や道具類を供給するにたりる資財が、自分の所有としてであれ、だれか他人のそれとしてであれ、あらかじめどこかに貯えられてい場合だけである」とする。そしてこうした関連から、「資財の蓄積は事物の性質上分業に先だたざるをえないから、労働もまた、先だって行なわれる資財の蓄積だけに比例してますます細分されうるのである」し、したがってまた「資財の蓄積は、労働の生産諸力のこういう大改善を行なうためにあらかじめ必要であるから、この蓄積は自然にこういう改善を先導することになる」(以上 *Wealth of Nations*, op. cit., 258-9. 大内・松川訳 I、四四五—四六) というわけである。

このようなスミスの分業と蓄積との関連にたいする理解は、いわば分業と蓄積との理論的前後関係についても、また彼の生産力視角からする労働一般の把握についても、先述の論点について見落すことのできない内容を含んでいるものと思われる。この第二篇の「序論」におけるスミスの叙述は、分業としての労働生産力の発展にたいし資財の蓄積が前提されているわけであるが、蓄積・分業の時間的前後関係というような事柄についてはともかくとして、両者を、その生産力そのものにおける表裏の関係として強調することになっている。もともと、こうした強調は、明らかに第一篇の最初の諸章での分業論とは異なっていて、ここでは蓄積を前提とする分業の強調である。しかもこれが、彼の生産力的な視点でとらえられると、交換を前提とする蓄積、したがって社会的分業をすでに前提とする蓄積の不欠性の指摘とされてしまうのである。それゆえ、この第二篇の最初の部分の叙述からすれば、彼の分業に基づく商業社会というのは、すでに蓄積を内包する関係のものと考えられていると言いえよう。この点は、

彼が第一篇第一章において技術的分業を説き、いわば「過去の対象化された労働」としての機械類とその分業との関連に言及しているさいには、事実上暗黙のうちにそうしたものとしての蓄積が裏打されていることになっていたとも言えよう。しかし、第一篇の分業論をもっぱら分業のみを中心として説くことになっているのは、「序論と本書の構想」で指摘されている理由とともに、スミスの労働価値論の論証に不可欠な装置として、「分業」としての労働生産過程がまず根本的要件をなすものであったということである。こうした事情で、第一篇では二次的要件とされた蓄積が第二篇においてむしろ積極的關係とされ、蓄積に対応する分業という関連の説き方がなされてくることになった。したがって、「分業」とか「蓄積」とかはスミスにとっては、彼の生産力視点に基づいて展開される理論的領域でどちらかが基本的關係にあるものとされるだけであり、「別の法則に」従うかたちで概念的に峻別されるべき性格を有するものではなかった。

このようにみるならば、スミスは、分業・蓄積を、社会の経済的基礎過程において労働生産力の発展を担うものとしては、より基底的なもの、より具体的なもの、この両者の相互依存的性格を見ており、本質的に区別することはなかったと言いえよう。それゆえ、彼は、分業とか蓄積とかに対応する何らかの区別をもって、生産力の担い手としての労働および社会的存在として価値を担う労働を把握してはいないのである。したがって、価値の実体をなす労働のこうした把握からすれば、剰余価値を担う労働自体は、すでに彼の分業論において内包されているものと思われるのである。もちろん、彼の独自の労働価値論の性格からすれば、すなわち自然と労働との交換関係として説かれた労働価値論からすれば、剰余価値形成の能力を有する労働を想定していたとしても、剰余価値の形成それ自身を明示する道は閉ざされていた。彼に可能であったのは、自然から受け取る労働生産物を一方では「自然的報酬」「自然的賃銀」として表現することであった。また他方では、これが、「土地の占有や資財の蓄積が最初に導入さ

れ」したがって「労働の生産諸力における最も顕著な改善が行なわれ」たことによって、どのような効果を受け取ったかは「これ以上さかのぼってあとづけるのは無益であろう」として処理されることになるだけであった。そして、ここで描かれている「生産諸力」の「最も顕著な改善」の商品経済的形式としての資本・賃労働・土地所有の三階級分化のもとでは、現実的には剰余労働部分を含まうるものとして分業論での労働生産物を「分けあう」関係が成立することになるだけである。さらに、この剰余労働部分を生産的労働の社会的規定としも、価値形成増殖過程においても確定しえなかったスマイスに可能であったのは、これら三者からなる価格の「構成部分の実質価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる」という投下労働価値論の支配労働価値論への移行の論理なのである。しかも、この移行のさいに、投下労働価値論、支配労働価値論の両者にたいして彼の不変の価値尺度たる労働を対置すれば、「事実上」Additional quantityとしての剰余価値が現出しなければならなかったのである。したがって、これはあくまでも、彼が分業に基づく商業社会という労働生産過程を自己の原理の基底に据えたことと、この労働生産過程の「交換過程」的把握とから「事実上」生じたという性格をもつものとしなければならぬ。先きに引用した文章のなかで、マルクスは、「労働能力」の再生産のための労働時間と「労働能力」がなしうる労働とが非常に違うものだとすることを、A・スマイスはよく理解していた、と指摘した。確かに、結論としては、マルクスの指摘は明確であるし、十分なもののようである。だが、スマイスがそのことをよく理解した仕方は、必ずしもマルクスの指摘に十分適合しているわけではない。スマイスは、彼の体系の独自性のなかで、やはりそのことを独自に理解していたと考えられるのである。

もちろん、マルクスの「経済学批判」体系の形成過程において見出されるこうしたスマイスの論理そのものとマルクスの批判的視角とのずれが、ある決定的性格を極印しているとするわけにはいかないであろう。つまり、マルク

スにとつては、スミス理論は彼の原理的な論理形成にとつてきわめて重要な検証対象であつたとはいへ、そのすべであつたわけではない。少なくとも、スミス批判において示されたマルクスの原理的把握に関する問題は、彼のリカード批判についても検討されなければ、その意義をより十分なものとすることはできないであらう。

(1) マルクスのこうした「裂け目」(あるいは別の表現では「矛盾」、「当惑」の強調は、通常、スミスの第一篇第五章と第六章との理論展開に関する説明にたいして、「混乱」を指摘し容認する場合の根拠となつたものと思われる。しかし、このような理解は、他方では多くの場合スミスの労働価値論の根本的性格を「労働の価値」による商品の価値規定として考察し、しかもそうした労働価値論の性格からすれば、スミスにおいて第五章と第六章との関係が、たとえば投下労働価値論の放棄、支払労働価値論への移行とならざるをえない関係にあるとしているのである。そうだとすれば、ここでは、スミス自身について彼の労働価値論の根本的性格における欠陥が強調されうるにしても、そうした「混乱」の主張は理論的説明の本筋となりうるものではないのではなからうか。

たとえば、船越経三氏は、右のような点に関連するスミス理論の説明を次のように与えておられる。

「スミス価値論の体系には、投下労働 $\parallel$ 分解価値説、支配労働 $\parallel$ 構成価値説の二つの系列が存在し、相交錯しつつ展開されているのであるが……、これにたいしてマルクスの目をもって、科学的スミスと俗流的スミスの共存を指摘することは容易であるが、それはスミスを真に理解する道ではなく、問題の解決にはならない。スミスにあっては、この両者は、あくまでもその内的論理によつて相互補充の関係におかれているのであり、……その場合、自然と人間との商品交換を設定した投下労働価値説の「対自然的構成」がその起点である……。」

「要するに、スミスは、単純商品生産社会の富は、その商品によつて支配しうる労働量によつてきまるといふ富の視点から出発したのであるが、資本主義社会においては、それはまさに資本の立場になるのであり……、彼は、こうした資本流通の法則を商品流通の法則と混同して、それを商品価値一般にまで拡充したのであるが、そのとき彼の誤謬が始まるのである。しかし……、スミスは、投下労働、支配労働の二重の価値規定を併置することによつて、彼なりの論理によつて、……自然と人間、人間と人間との間の商品交換の過程——その過程は「対自然的構成」において統一されている——を明らかに

しているものであり、彼のそうした論理は、……一貫して彼の価値体系をつらぬく論理であった。……すなわち、スミスは多くの混乱をとめないながらも、二重の価値規定の併置によって……剰余価値の源泉がどこにあるかを明らかにしているのである……。」(『アダム・スミスの世界』、東洋経済新報社、一九七三年、二五〇—二五一ページ、傍点引用者)

最初に引用した「スミス価値論体系……」で船越氏が言われていることについては、まったく言われる通りであり異論はない。しかし、そうした理解に立っておられながら、しかも「彼(スミス)なりの論理」の一貫性を主張されながら、なぜ「誤謬」や「多くの混乱」が説かれるのかは、疑問とせざるをえない。氏自身では、おそらく「資本流通の法則」、「商品流通の法則」がそうした指摘に介在しておられるのであろう。だが、とりわけこの「資本流通の法則」——これについては卒直なところその理論的内容を十分理解することはできない——と、「対自然的構成」において統一されて「一貫して彼の価値体系をつらぬく論理」とされていることはどのようにスミスにおいて内在的関係をもたらしめていることになるのであろうか。やはり、氏自身としても、結局「スミスが『対自然的構成』たつ投下労働価値説をもってその価値体系の起点としたことは、その相互補完の関係において支配労働価値説の説定を不可避ならしめ、そしてそこで労働(労働力ではなく)と賃銀と等置したことは、次の瞬間においてはその論理的必然性をもって、……いわゆるを『三位一体的範式』の設定を不可避ならしめることにな(る)……」(同前、二五一ページ、傍点引用者)ではないであらうか。なお、氏の言われる「単純商品生産社会」については、拙稿、前出論文、九八ページ注(ア)で言及しておいた。

(2) 重商主義に対立する自由主義者スミスは、重商主義による商品経済の「流通」主義的分析の否定のうえに、商品経済的「富」の本質としての労働一般を、すなわち分業としての「一般的な社会的労働」の把握を確立したのであった。こうした事情は、マルクスによっても、たとえばこのように説明されているのである。「……ステュアートは、重金主義と重商主義との合理的表現である。／資本の理解についての彼の功績は、「ある一つの」特定階級の所有物である生産諸条件と労働能力とのあいだの分離過程が、どのようにして起こったかを指摘した点にある。……この分離過程は、A・スミスにおいてはすでに完成したものととして前提されている。」(Mehrwert, Werke, Bd. 26-1, S. 11.)

しかも、こうした指摘は、「資本論」第一巻、第二篇第四章冒頭の「商品流通は資本の出発点である。……世界貿易と世界市場とは、一六世紀に資本の近代的生活を開くのである」というマルクス自身の理解と重なることが可能であらう。そして、重商主義またはステュアートにとって一定程度可能であった「近代生活史を開く」「資本の最初の現象形態」の把握

は、それを「すでに完成したものととして前提」したスミスでは、重商主義否定の視点で無視されまったく脱落することになっているのである。したがって、スミスにおいて「資本の分析」の進歩を評価することは疑問とならざるをえない。むしろ、こうした側面でも、「スミスの理論体系が、彼の生産力的観点から展開されたものであって、十分な意味での重商主義批判の体系になることができず「抽象的対立」に終わっていることを見落すわけにはいかない」(時永淑「経済学史」、改訂増補版、法政大学出版局、一九七一年、一四五—一四六頁)ことが考慮されるべきであろう。

(3) スミスは、いわば商品経済的「個」個人を絶対的条件として対象の抽象を行なったわけである。これは彼の自然法思想と深く関係するものであるが、彼の経済学自体についてみれば、そうした「個」は同時に彼の生産力視点からする社会の労働生産力の担い手としての存在でもあるわけであり、しかも、それはどういふ場面に登場しようとも、そうした根本的性格を変えようようなものではなかったように思われる。したがって、そうした個人は社会の経済的基礎過程の内部では直接的生産者であり、三階級分化の社会的枠組のもとでは、生産物を「分け合う」存在であるという差異が結果的に生じているだけであって、これは、個人の存在の本質的な変化を示すものではなく、いわば程度の差を示すにすぎないものであろう。つまり、スミスの概念で表わせば、それらは結局自然価格を構成する自然率に対応する個人にすぎないのである。

(4) 前記の注とも関連して、なお、次のような理解に注目されるべきである。「重商主義に対するスミスの自然法的な立場からするかぎり、スミスにおいては、『文明社会』の本質は、基本的には、交換とその基礎をなす社会的分業とに基づくものとして把握されたのであり、他面において、現実には階級分化の存在を見逃すわけにはいかなかったのである……。そしてそのために、スミスにおいては、『雇い主』階級も、産業資本家階級として、労働者階級——スミスのいう『職人』階級つまり『勤勉な人々』——との対立的関係を明確にされることなく、彼らの労働の生産物を単に「分け合う」階級として把握されるにすぎず、そのかぎりで地主階級も同様に把握されることになったのである……。」(時永淑、前出書、二二九—二三〇頁)

(5) こうした点と関連して、マルクスのスミスにたいする評価のもう一方の側に位置するリカード評価を取り上げてみなければならぬのである。だが、リカード理論をめぐる問題については、別稿での考察に譲らざるをえない。ただここでは必要なかぎりの指摘を行なっておこう。つまり、リカード理論は実には、マルクスのリカード評価すなわち「ブルジョア制度の抽象の一般的基礎の統一の理論的な全体的観察」を成功させるために、重要な「裂目」の縫合がなされているということであ

る。それは、リカードの『原理』第一章「価値について」の第四、五節でのいわゆる労働価値法則の例外的修正に関する問題、および第六節「不変の価値尺度論」がリカード理論に占める性格を考慮するならば、明らかなことである。しかも、リカードの場合、その縫合はいわば明確な理解をもって意識的に行なわれたと思われるのである。したがって、彼が仕上げた論理の結果からすれば、確かに、マルクスの指摘のように、「統一的理論的」な「観察」となっていよう。だがその反面、彼の意識的な縫合に着目するならば、リカードおよび彼の理論構成にとつては、むしろマルクスの言う「裂目」はスミスに比較してもっと深いものであったと言いうるのではないかと思われるのである。

(6) 時永淑、前出書、一四二ページ。後述のように、マルクスによるスミスの剰余価値の「一般的範疇」としての認知は、「事実上」の確認というよりは、むしろスミスにおける資本・賃労働関係の一定程度の理論的展開によるものとしている傾向が強いと思われる。もちろん、マルクスのスミス評価——すなわち「裂目」の強調に示された評価——からすれば、当然この場合にもその理論的性格をも強調することにならざるをえないわけである。

(7) 明らかのように、マルクスがここで与えているスミスの評価およびスミス理論の検討に関しては、労働と労働(能力)との区別を軸とする彼の独自の資本・賃労働関係解明の理解が横たわっている。すなわち、「かれはまず、『労働』と『労働力』とを区別し、古典派の表現である『労働の価値』を『労働力の価値』と表現しなおした。この改鑄は絶妙な効果を發揮したというる。これによって価値実体としての『労働』と『労働の価値』という表現における『賃銀』とが区別され、前者において古典派の『労働の(価値)の価値』という「同義反復」を……、後者において、スミスの労働価値説を生産費説に転回させた軸——労働の価値(賃銀)を商品の『交換価値の尺度』とする点に立脚する——を決定的にとりのぞいた。」(中野正、前出書、一〇五ページ)ところが、中野教授がここで「改鑄」と表現されていることには、またはマルクス自身が「等価物が交換」される——法則——と「別の法則」との理解にかかわる問題として、かなり考慮されなければならない論点が介在しているのである。中野教授によれば——ただし、教授はすでに『資本論』におけるマルクスの展開を問題にしておられる——、それは次のようなことである。

「マルクスがさいしょの交換(貨幣が労働能力を特種な使用価値として買うということ)を等価の交換とみなしたのは、貨幣が労働力の使用価値をその価値にしたがって買うと考えたからである。だが同一の事態を『結果において事実上、ヨリ少ない労働とヨリ多い労働との交換』とみることでできたのは、第二の交換(労働者が資本家の工場でつくりだす価値産

物  $v+m$  と、資本家の提供する可変資本価値  $v$  とが相互に交換されるという表象)において賃銀  $v$  にふくまれる労働と、価値生産物  $v+m$  にふくまれる価値実体としての労働とが交換されるものとみなしえたかぎりにおいてである。いいかえると、さきに資本家が価値にしたがって買った労働力の使用価値を、生産資本の生きた要素として資本の生産過程において消費する過程を、労働者が自己労働の成果  $v+m$  をもって資本家の貨幣  $v$  にふくまれた労働と交換する過程とみなしえたかぎりである。ということは、労働者は第一の交換において労働力の価値どおり賃銀を支払われているのに、工場のなかでふたたび、労働者が  $v+m$  をもって資本家の  $v$  と交換するとなす想定に帰着する。(中野正、前出書、一〇九ページ)

中野教授がこのように指摘されている点を、ここでのマルクスのスミス批判についてみてみると、おおよそ次のようになるであろう。すなわち、諸商品の等価交換関係をもつて労働力商品の貨幣との交換を取り上げるならば、それは貨幣としての貨幣との等価交換の関係にあると言える。ところが、この場合、貨幣は  $W(A) | G | W'$  としての貨幣であって、一般の諸商品の  $W | G | W'$  がこの流通過程の全体で  $W || W$  となるさいの  $G$  とは同様の関係にあるのではない。それは労働力商品の価値に等価の形態を与えはしたが、価値そのものを完成させてはいない。その価値自体の完成は  $W(A) | G | W'$  の  $W'$  においてなされなければならないのであって、これは今度は  $W | G | W'$  が  $W || W$  として完成することと対応する。 $W(A) | W'$  の関係では  $W'$  は支払い労働プラス不払い労働として労働力商品の価値を完成させている。つまり、端的に言えば、ここではスミスの支配労働価値論をきわめて巧妙に逆用しているように思われる。しかしそれだけに、こうした処理方法は、中野教授の指摘——「労働者が  $v+m$  をもって資本家の  $v$  と交換する」という指摘——のように、きわめて「交換」に傾斜する労働力把握の危険性を伴うものであった。

(8) ここで問題としていることは、スミスが第一篇第六章以降で投下労働価値論の見地を放棄し、結局、支配労働価値論による価値構成説へ移行したことによって生じたこの価値構成説のいわゆる生産費説的不合理性に關してではない。むしろ、こうした移行が、スミスにおいては理論的な困難を伴わずに、あたかも当然の論理的帰結であるかのように説かれていることの問題なのである。

(9) したがって、こうした点は言い換えれば、「スミスが「分業論」においてのべているところを、「国富論」の「序論」でかたがだしている問題のたてかたと対応させ」てみれば、「スミスが生産力の根底を分業におき、機械とか、技能とかいった生産力の諸側面を、分業から派生してくるところの個別的諸契機としておさえ」ているとしうるわけであろう(内田義彦「増補・経済学の生誕」、未来社、一九六二年、二二四ページ)。